

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第169号（2020年6月）

《本会報も15年目に突入しました》



白井啓治

（八）大地に一粒の命のはぐくまれ

（2009年6月11日）

『雑木林に夏の鶯ケキョと啼く』

天気が心配された日曜日であったが、快晴となり気温も真夏並みとなった。我が百姓の師匠のところで田植えが行われたのであったが、目の前の里山には、啼きの下手糞な鶯がケキョ、ケキョとへつぱり腰に稲苗を植える我々に対して目糞が鼻糞を笑うがごとく囃したててくれた。しかしこれは東京からやってきた人達には最高の贈り物となった。

小生はと言えば、午前中の苗取りは手伝ったのであるが、午後の田植えは腰痛持ちなので、口だけの手伝い……にさせてもらった。

横一列に白線に沿って自分のコースを植え進めるのであるが、全員マイペースに作業するのを、ゴール地点の畔に太鼓（ジェンベ）を持って腰をおろした小生が、何コース遅いぞ！ 何コース植え

方が曲がつてるぞ！ と里山の鶯に劣らぬリズム音痴に太鼓を打ち鳴らしながら罵声するのであった。

夜、家に帰り風呂に入ったところ、苗取りをした手や腕が田んぼの泥の臭いが滲みついて石けんで洗っても取れないのであった。ちよつとヘドロに近い臭いなのであるが、ヘドロとは全く違った懐かしい臭いなのである。それは滋味あふれる大地と水の温かい匂いであった。



（絵：兼平智恵子）

そう感じた途端、洗い落としてしまう事が勿体なくなり、急いで石けんを流し落とした。田んぼの匂いは石けんの影響の少なかった腕の方に残り、

布団に潜り込むと、昼間苗取りの時に感じた水や田の土の温もりとなって脳内を優しく包み込んでくれた。大地の揺らぎに脳が漂っていると、野口喜広氏の奏でる土笛（オカリナ）が聞こえてきた。野口氏には劇団ことば座の音楽を良く担当してもらっているのだが、彼は彼の作り奏でる土笛・オカリナは母なる大地の声だと言っている。確かに腕に残る田の土の温かい匂いの揺らぎと、彼の奏でる土笛の声の揺らぎは同一のものであり、母の胎内にいるかのような安らぎを覚える。里山に伝わる物語をモチーフにした戯曲の中に「…大地の鍬に打たれて 新しき風の通い 水の流れて一粒の命のはぐくまれ…」の詩を書いたのであったが、今まさに、そんな感覚に浸りまどろんでいる。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）



今月号は11年前の今頃、新型ウィルスがやはり世界中を震撼させた時の記事をもう一件載せます。

(九) 話題はどうしても新型コロナウイルスに

(2009年5月21日)

『小窓を開けたら五月の風やって来た』

5月も半ばが過ぎると、雑木林の緑たちも色濃く夏を迎える準備を始める。だが、まだまだ毎日の寒暖の差が大きく、私など時に体がついていかなくなってしまふ。

こんな時期、忌々しいことであるが、豚インフルエンザなどという新種のウイルスが突然に広がり出した。この里山には押し寄せてきてほしくないものである。

しかし、この新型コロナウイルスによって、つくづく地球が小さくなり、世界が狭くなったと実感させられる。メキシコ発・人感染ウイルスが、発見と同時に全世界に広がってしまったのだから、地球が小さくなってしまったとしか言いようがない。小窓を開けたら風がたずねて来た、等と呑気に風流ぶっている余裕はないのだ。小窓を開ける前に、先ずはマスクをしなければいけないのだ。何とも無粋なことである。だがこの新型コロナウイルスにはそれぐらいに神経を使わなければいけないのだ。

大袈裟ではなく、地球というこの自然界に生命を維持し、己の分身を次の世代に残すというのは、実に壮絶な戦いが必要なのである。ウイルスだって己の分身というか、子孫の生存の為に常に新型という強力なウイルスに、進化というべきか変化というべきかをしていかなければならない。そして、自分の種の生存の為に、それはそれは大変な犠牲を何かに強要しなければならないのだ。聖人面をして少しでも遠慮しようものならたちどころに種は滅んでしまうのだ。生きるということとは、

何かの、誰かの犠牲の上に成り立つということが出来る。



(絵：兼平智恵子)

明日、天気が良ければ、我が百姓の師匠の所へ行くかと思っている。少し前に手伝いに出かけたら、空豆にアブラムシが異常発生していて大変な思いをしていた。

天敵であるテントウム虫も沢山いたのであるが、それでバランスがとれるような発生状態ではなかった。空豆の枝をゆらすと、両の掌にすくい取れないほど落ちてくるのである。この調子だと、来年は、アブラムシ太りをしたテントウム虫が異常発生するかもしれない。だが、新型インフルエンザ・ウイルスよりはまだましだ。



地域に眠る埋もれた歴史(61)

木村 進

【八郷地区】(4)

2 柿岡地区

2.4 善慶寺

柿岡城のあった地には現在柿岡小学校が建っています。この台地の麓に「善慶寺」という寺があります。



柿岡城址台地の桜並木から善慶寺を見る

長倉義興が長倉から柿岡に移ったときにこの善慶寺も一緒に移ってきました。そのため、この長倉氏(佐竹)の菩提寺となるわけですが、長倉義興は些細なことで佐竹義宣に逆らい、慶長4年(1599)常陸太田の正宗寺に幽閉され、1600年4月に死んでしまいました。この当時の状況では毒殺された可能性が高そうです。こ

れで柿岡の長倉氏は滅んでしまいましたが、同じ年に、佐竹義宣も家康により出羽石（秋田）へ転封になってしまいました。

江戸時代にこの地を得た「稲葉正勝」は徳川家光に可愛がられていたため、次第に大大名になっていきます。まずは父の後を継いで真岡藩4万石の大名になります。柿岡藩はこれで真岡藩に組み込まれて廃藩（1628年）となり、柿岡藩は5年間で消滅しました。

その後、家光に従って稲葉正勝は老中になり、小田原藩8万5千石を得て移り（1632年）、真岡藩は小田原藩の飛び地となり、後に天領（1783年）になりました。



長倉氏は滅びましたが、今も善慶寺（禅寺）は落ち着いた雰囲気のある寺として守られています。

ます。現地に建つ本堂修復記念碑に書かれています。寺の由来を転載します。

〈善慶寺の由来（禅宗 曹洞宗）〉

「延元元年（1336年）長倉義春公が現世の安穩を願い大田宗覚禅師（佐竹行義公の三男三好丸）を開山の師として長倉に善慶寺を建立する。文禄年間（約400年前）長倉義興公柿岡城主に任ぜられ長倉家の菩提寺を柿岡に移し本尊釈迦如来を安置す。文禄年間仏殿・法堂・鐘楼・方丈の建立をする。八世住職益室大和尚のときなり。寛文3年（1663年）本尊の光背文珠普賢獅子像を新造す。文政13年（1830年）現存の本堂新築。天保2年須弥壇内陣彫刻欄間新設す。」と書かれていました。

さて、この善慶寺に明治末から大正時代には全国でサーカス公演などが盛んに行われた「柿岡曲馬団」の団長「柿岡春次郎」の墓があります。これはあまり知られていないようです。



石でできた亀の背中に墓石が乗っかっている柿岡春次郎の墓です。

もうかなり昔の記事ですが「キグレサーカス」の倒産が新聞に載ったことがありました。日本三大サーカスの一つが終わりを告げたと思われました。昔、テレビなどなかった時代にはサーカスの興業が地方でも数多く行われ活況を呈したものでした。「木下サーカス」なども見に行った記憶もあります。またモスクワのボリシヨイサーカスなどが来た時にも見に行った記憶があります。ではこの「柿岡曲馬団」というサーカス団を御存知でしょうか。八郷町史に載っていたのを思い出しました。柿岡の名前と八郷町史ですから、この地元で作られたサーカス団なのかと思いましたが、違っていました。柿岡春二郎（本名：荒川治二郎？）が率いた曲芸団で、明治後期から昭和初期までの間で非常に大きなサーカス団だったようです。春二郎は青森県八戸に明治4年に生まれます。一家は祖父が会津戦争で戦死し、青森にやって来ました。そして、若い時に横浜に出て小さなサーカス小屋の番頭となりいくつかの小屋を渡り歩きます。明治39年に柿岡一座（柿岡興業部）を興し、明治42年に大阪で喝さいを浴びて東京両国や浅草で興行を行って人気的一座になったといわれます。

大正時代には大変な人気で、団員は150名以上。当時はサーカス（曲馬団）がいくつもあり、そ

の中でも一番の人気で二番目が木下大曲馬（後の木下大サーカス）だということですから、人気の程がわかります。

ネットの古書の中にこの柿岡曲馬団の絵葉書（カード）がありました。

内容は「2頭の馬の背に3人の少女が乗って曲芸」「男性がバランス棒のようなもので片手倒立し、もう一方の手で2枚の皿回し」「団員数十人の集合写真」でした。そのほかの出し物としては、「大曲馬曲乗」「猛獣曲芸（熊）」「自転車曲乗」などの名前が載っていました。大正12年の関東大震災の時には、いち早く罹災者を慰安するためにチャリティ（2日間無料）で公演を行なっています。

その時の興業には「柿岡曲馬」「木下曲馬」「宮田洋行」「矢野曲馬団」「有田洋行会」「柴田曲馬団」「麻田洋行」などの名前がつづられています。そのトップに柿岡曲馬でした。

さて、八郷の柿岡市の名前が出てきませんでしたが、柿岡春二郎は大正三年に分家して柿岡に戸籍が移ります。屋敷も持つのですが住んでいたところは宇都宮のようです。ただ、吉生から養女をもらっており、戦後になって一座の活動はほぼ終わってから、この柿岡に移ってきたようです。

昭和29年に柿岡で死去。84歳でした。

善慶寺のすぐ裏手（本来は街道からはこちらが表）には古びたお堂がありました。いつごろ

建てられたものなのでしょうか。



普通神社には奉納額が置かれていますが、これはお堂の板壁に書かれていました。

我が労音史（19）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1989年の社会情勢と音楽状況

昭和天皇が逝去し元号が「平成」に変更される。天皇に関するテレビ・ラジオの特別番組放送は6局で25時間を超え、これに対する抗議電話がNHKだけでも二日間で1800件を越した。「日本のおたごえ」が40周年を迎える。この年の秋に芸団協を始め舞台・芸術に関わる諸団体による「入

場税撤廃対策連絡会議国会請願行動が行われた。全体で1204名（労音から15団体35名）が参加。署名「消費税廃止・文化予算充実」の請願署名126万人（労音は1200名）分を提出。

ソ連がアフガニスタンより撤退、北京・天安門事件が発生。東ベルリンで数千人の反政府デモが起り、ライプチヒで50万人のデモが起り、東ベルリンの壁が撤去された。ルーマニアのチャウシェスク政権が崩壊。米ソの首脳がマルタ会議（地中海）で東西冷戦の終結を宣言。

リクルート事件でNTT前会長（真藤恒元）ら2名が逮捕され、竹下首相が退陣。文化芸術家の反対を押し切って消費税が施行。宇野首相が女性問題で退陣（歴代最短）。し海部内閣が成立。東京ドームでオペラ「アイダ」を上演。オーチャードホール（東急文化村）開設。ブザンソン指揮者コンクールで佐渡裕が優勝。連合・全労連が発足。この年逝去の著名な音楽家・文化人は、尾上松緑・辰巳竜太郎・芥川也寸志・美空ひばり・松田優作・カラヤン・開高健・色川武大・手塚治虫・松下幸之助

1989年の労音の動き

新設された十条会館（R'sアートスタジオ）に25名の代議員で37回総会は開催された。総会議案書の冒頭では「労音運動が果たしてきた役割とその成果について認識を新たに、労音運動の発展を目指す方針と実践」が総括的に記載されている。それは、長年に渡る会員減少の中「労音運動が真に職場と地域に根ざすこと」「ブロック労音」の方針を出し、其々のブロックが地域に適合した方針と形態をもって活動し、民主的文化運動の中心的

な役割を担えるよう目指すことを提唱している。前年の総会で提唱された3ヶ年計画は、1000人の拡大方針とともに、23区と三多摩地域、その周辺に地域委員会を組織することを掲げた。この方針に沿って、二つの会館（大久保・十条）と三つの活動センター（お茶の水・北千住・蒲田）の建設が進み、更に府中センターの開設も決まる。同時に旧労音会館の職員5名が事務局に転入が決まり、専従体制が強化された。

総会では、労音運動を取り巻く社会・文化情勢を分析。ひとつは、最悪の大衆課税の消費税が導入され、入場税に代わり入場料金に関係なく（3000円以下無税だった）一律3%の課税が実施され、労音等の鑑賞運動や文化運動に大きな財政負担が課せられることになった。一方、企業のイメージアップ、商品宣伝を目的とする“冠コンサート”やイベントは依然として行われている。この年には、大企業の経営者による「企業メセナ協議会」が発足。これは企業の芸術・文化助成活動を推進するもので、国に対し優遇税制を働きかけ、企業と文化の新たな関係を探りながら、多面的な文化活動を目指すものです。

まや、前年の天皇重体以降、天皇制を美化するキャンペーンを始め一連の反動攻勢に対し、東京労音運営委員会は反対声明を出した。この年の死去に伴い、政府機関の「歌舞音曲自粛」の決定で、音楽・演劇の公演を始め文化催事の中止が相次いだ。これらに音楽会では、音楽家ユニオンが反対声明を出し、全国の労音では平常通りの例会を行った。前年の総会で、日本文化行政の貧困は、貧弱な文化予算にあることを明確にした。この年の文化予算は微増の409億円で、国家予算に占める

割合は依然として低下している。仏の0.06%、スエーデンの1%に比して日本は0.06%と極端に低く、伊や英に比しても極めて貧困な予算、しかもその中身は文化財保護関係が70%を占めている。ヨーロッパ諸国では芸術文化振興関係が最大の割合を占め、しかも文化財保護は別建てです。国民の自主的な創造芸術活動にたいする「民間芸術等活動費補助」予算は8年連続後退し、1983年度の40%減になっている。

3ヶ年計画の目標である「ブロックの独立労音体制」を目指し、積極的な地域例会に取り組んだ、都心・東部・南部ブロックでは、例会を一つ一つ丁寧に成功させ財政の基盤を築いた。地域其々が専従体制を確立し、独立労音としての運営形態へ踏み出した。なかでも、東部ブロックは、足立・墨田・葛飾の3地域が隔月例会を設定し地域労音を目指した。足立地域は400名の会員を組織し、地域専従を配置し「足立労音」を発足させ、年間6回の地域例会をすべて成功させ、年間の例会計画と組織計画を作り、系統的な運動の拡大を目指してきた。後半には1000名の目標で「大型例会」も設定して会員数を増やし、文化運動の中心的な役割を地域で果たしている。城北・都下ブロックでは、バレエ・竹山・ルスタビ例会を設定し、職場・地域・学園との結びつきで会員を組織し、城北ブロック88%、都下ブロック85%と飛躍的に会員拡大を果たし、また西部ブロック133%北部ブロック138%とそれぞれ拡大し、全体では25%増となった。例会活動のまとめとして「会員数と例会数は増えたが、事前の企画検討の十分さから取り組みが遅れ、組織活動に遅れが生じた。課題としては、企画委員会を中心に情報収集

などの事前調査活動と同時に、サークル・会員の要求を基礎とした例会政策を確立し早期立案を目指す」が確認した。

全国共同企画（海外演奏家）では、二つの大型バレエ「マヤプリセツカヤとスペイン国立クラシックバレエ」「モスクワ・クラシックバレエ」を取り組む。運動の裾野を広げ、広範にバレエ愛好層を組織し、東京文化会館を軸にした都心部の他、三多摩・大宮・浦和・市川等の周辺部にも会場を設定した。「マヤプリセツカヤとスペイン国立クラシックバレエ」は、20世紀最高のプリマと言われるマヤの円熟したバレエとスペインバレエの若さ溢れる群舞が観客を魅了して高い評価を得て、200名を組織。「モスクワ・クラシックバレエ」はオーケストラを含む200名の大編成初来日、男性舞踊のマラホフやガリムーリンが高度な技法と演出が話題となり、1000名を超える観客を組織。他に、Rベルマン親子（P）Sブーニン（P）Nトゥルリー（P）スメタナトリオ（室内楽）邦人では、辻久子（V）山形由美（F）関孝弘（P）などの企画、其々芸術的にも優れた内容で高い評価を得た。

ルスタビ（グルジョア民族アンサンブル）ロス・カルカス（ボリビア民族楽団）高橋竹山の例会は、ブロック共同例会として取り組まれ、民族的風格を持つ優れた内容で成功した。ルスタビは、卓越した技量を持つ男性コーラスと勇壮で激しい民族舞踊は感動的なステージを創り、都心・東部・南部・北部・都下の5例会はすべて満席、3500名を組織。夏には合唱組曲「いのちの賛歌」（寺原伸夫作曲）は、第九の取り組みと連動させ、年間を通して大合唱を組織する意図と民主団体・文化団

体との結びつきから反核平和の運動を広げること

を期して取り組んだ。しかし、合唱練習と組織活動の関係が円滑に進まず、力量も不足していて目標は達成できなかった。一方合唱組曲「像列車がやってきた」(藤村紀一郎作曲)は、地域のうた「こえ運動の協力関係が進み新たな成果が生まれた」

第九の合唱運動では「強力な実行委員会の確立」と「新しい団員を大切に」を目標に取り組み、十条と大久保の練習会場では新しい団員を組織する活動と指揮者やソリストの協力も得て、2例会

300名を達成、6年ぶりでした。この成果の発展として、全国労音企画の「全国労音創立50周年記念・ドイツ民主共和国第九合唱と音楽の旅」(全国300名の代表団長木下明男)に35名が参加し、感動的な成功に力を果たした。

ポピュラー例会では「由紀・安田童謡コンサート」「菅原洋一」「ふきのとう」「アダモ」例会に取り組み、豊かな歌唱力と充実した内容で、其々の会場(300名)が満席となった。

例会外の活動として、スキー友好祭は片品スキー場に20名が、夏の友好祭は山中湖畔で関東労音との共催で188名が、集まり相互の友好と交流を深める。これらの成果の上に、第13回世界青年学生友好祭(朝鮮民主主義人民共和国開催)に2名の代表(全国で5人)を派遣した。

東京で開催された全国労音幹事会議は、40周年記念全国労音連絡会議を翌年2月に、労音発祥の地大阪で開催することを決定した。

つづく

石岡市指定文化財(二十三)

兼平智恵子

・これからもずっと ずっと
3密 3守(マスク・手洗・うがい)
智恵子

ビルの立ち並ぶ上空に、医療従事者の皆様への感謝の意を表す、6機のブルーインパレス飛行。まさしくコロナウイルスを突き刺すかのように。その飛行に幼子のように手を振り、体いっぱい喜びと満開の笑顔を見せていた医療従事者の皆様。テレビの画面で見ると私達にも大きな大きな励ましと活力を届けて下さったブルーインパレス、心が熱くなりました有難うございました。

五月二十五日緊急事態宣言全面解除！
コロナウイルスとの共存、新たな日常生活が始まりました。自分と大切な人を守るために！不自由を常とし、積極的に明るく前進したい！負けないで生きてるって素晴らしい又会えるから！
当会報5月号でお願いした「お願い」をもう一度。

早期のワクチン開発
誰もが受けられるPCR検査
いち早くの軽症、無症状者の発見と完全隔離
早期の治療
医療や介護、スーパーなどの現場で働くエッセンシャルワーカー(生活必須職従事者の皆様、営業の自粛や休業に見舞われた皆様、そして外出自粛やテレワークの国民の皆さんの努力が実りました。
これからは一日一日を大切に、丁寧に、慎重に暮らしていきたい。

本題の文化財紹介に入ります。

今回の文化財は当会報5月号で紹介しました矢口家に残されている中世末から大正期にわたる膨大な古文書で、その大部分が当石岡市域に関するもので、この地域の歴史を明らかにするうえで極めて貴重な資料であり、江戸前期の府中町関係の資料は、茨城県内においても他に例を見ない、学術的価値の高いものだそうである。

常陸府中矢口平右衛門家文書一括
国府三丁目一―一三
有形(古文書)
平成二・二・一四指定

当会報5月号より矢口家の年表を振り返ってみますと、武蔵国六郷川の矢口郷所領の先祖矢口重維より十一代矢口重士の子、元禄十三年松平播磨守の支配になると郷士となり府中本陣を司り代々平右衛門を襲名。

膨大な文書の中から一点のみご紹介します。
藩政時代、全国各所に「本陣」が設けられたが、「府中本陣」は他の本陣と異なり、矢口家では、水戸義公より「あなたの敷地内に宿舎を建てたい」意の文書に接し、喜んで快諾、落城と同時に、その留守居役を仰せ付けられ、以来水戸様の本陣となりました。

水戸様宿泊の都度、その本陣に対し相当の金品を遣わされ、しかも家人は及ばず、十九人の召使にいたるまで徳を施しています。

御 目 録

覚

一 御掛物 栄川筆 式幅

一 白銀拾五枚 同人 母江

一 白羽二重 壱 正

矢口平右衛門

6

外に御手品多葉粉入 五ッ

同人妻へ

一 丹後 稿 式端

外二同 断 同人 嫡子

矢口判事江

一同 壺端

外二同 断 同人 次男

平吉江

一同 壺端

外二同 断 同人末女

須や江

一 縮緬帯地 壺筋

外二同 断 同人妹

兩名江

一 郡内 稿 壺端宛

外二同 断 同人甥

府中屋忠次郎倅

一同 兩人江

半蔵

一 金千正 同人召使男女江拾九人

右之通 御座候 以上

十月

栄川筆は狩野派掛軸。多葉粉入

はタバコ入である。

以上のように、水戸様専用の宿舎であり、矢口家は松平藩でありながら、水戸藩にも属していたらしいと言われている。

参考資料 石岡市の文化財

石岡市郷土資料第二六号



自然と話している

伊東弓子

限らない人間の贅沢三昧の姿の中に、コロナの影を見た。世界中を喰い潰す勢いだ。それに比べたら私の贅沢など小さい物ものだと、塾思った。でもそこには故郷と、いう宇宙がある。決して小さいものではない。無限に広がっていて人が生活し、生物が住み、植物が生えている。

遠い昔、玉里の大半が霞ヶ浦の一部だったろう。その名残りが里山や谷津田の姿だろう。そこに、人間との新しい歴史が続けられてきたのだろう。台地の北側に多い、中台の上池・下池。桜池（塙池）の奥。田木谷池。野村田池。大池・小池から東、南、西側の霞ヶ浦に向かって延々と続く谷津田は甲乙つけ難いが、特に四・五月は美しい。稲

づくりの為に草刈りが行われ、冬に貯えた堅い泥土が掘り起こされ、水を張る。待つてましたと、ばかりに里山の木々が草が鳥が水鏡する。中でも山桜、若葉、新緑への衣替、模様替の素晴らしさ。生産活動と共に、そこには沢山の物語が生まれてくる。

朝早く犬との散歩の時、里山と水田の一角に駝鳥が佇んでいるのを今年も見た。毎年見るのだが、堂考えても不思議だ。石岡の駝鳥園からでも逃げ出して来たのか、迷子になって帰れないのか。車の人にも見えるか、昼もいるのかと、あれこれ思う。見つけた一瞬の喜びは大きい。しかし、近づくとその姿はなくなってしまう。恐れてか、見間違いかと考えなおしたりしてみた。私が近づく度に、駝鳥も一歩一歩先へ行ってしまったのだろう。思うに西から行くと会うが、南や東、北側の道から行つては会えないのだ。

殆んど人には会わず、我天下とばかりの良い気分、偶に車一台がスピードを出して通り過ぎて行く。突然可笑しな音が聞こえ出す。「ガアウボン、ガアウボン、ガ・ガ・ガ」と、ものすごい音が鳴り出す。水の流れでもないようだし、地上からでも上空からの音でもなさそうだった。あまり真剣になる必要もないと思い、コンクリートに固められて生き埋めになった蛭や蛙、目高や水曜（あめんぼう）の泣き声かとも思えて不気味だが、一人の人間として小さな生きもの達に済まない気もした。流れの川上に棲んでいた竜の泥塗れの体をのたうって苦しんでいる叫びかもしれないと、哀れにも思い聞いていた。

一寸高く、下の方に“ちよろ、ちよろ”と、いう程度の水の流れに、一本橋が架かっている所が

ある。四十年前頃、二才児十五・六人と散歩に出かけて見つけた所だ。その一本橋を片手渡しで一人ずつ歩かせた。子供達も臆せず、私も大胆だった。十五人が渡り終えて私も渡った。みんな喜んで事をよく覚えていた。あの日から何度この道を通ったことか「ありさんの一本橋」と名づけて思い出に浸る。本物の蟻が行列していたこともある。あの頃は真新しい長方形の角材だったが、今は大分朽ちてきている。月日の流れを感じながらも、何の為に此处に架けたのかと思ってみる。傍らに菜の花が咲き、八重桜が咲く。左の方には玉里小学校の前身である当時の戸長宅の長屋門が見える。右の方の柿畑は村で初めて建った小学校があったそうだ。目の前の田には渋湯が湧いて、大勢の人で賑わったとか。

木々が生えている林は、余り草が延びていない。倒れた木が苔生す、蔓が絡んで大木だけに異様な形に見える。何本か倒れた木々があると、これは又、恐竜時代の一場面とも感じ、気味悪いというよりその中にいる自分が何故かきみがよかった。吠え合う声までが耳の奥に届いてくるようだ。

友が畑作りに精を出している場所がある。そこを通ると「彼女はいるかな」と、気になり下の畑を覗くのが常で、この日も声かけようと覗いてみた。一瞬大声を上げてしまった。黒い大型の栗鼠が立っていた。横向きだったが大きな尻尾が余計に不気味だった。二度と見たいとは思わなかった。月明かりの中にこんな光景を見たら、どんなショックを受けるだろうか。

舗装しない道は足が軽く進む、轍の跡を残し草は生えないが、間に白詰草や蛙など沢山の花や草が延びて一本道を作っている。鼻歌も自然に

出てくる。そんな時、上げた足の置き所がなかった。蛇だ。声と同時に体がよろめく。ああ！曲がりくねった縞のうねりに驚かされた。

もう二十年近くになる。孫三人と連れ立って霞ヶ浦へ行くことにした。当たり前の道では面白くないので、淋しい程の山道から続いて、竹藪へ入った。一人が「お婆ちゃん、かぐや姫ってこんな所で見つかったんだよね」「本当だ。そうだね。」と、応えて感動の余り見とれていた。孟宗竹の形が整い、一本一本が空に向かって立ち並び笹の音が心地よい音を奏でていた。そして地面を覆うのは、草でも花でもない笹の葉だった。思わず美しいと思った。霞ヶ浦の堤防沿いで遊び、帰りには打ち上げられた木の根を、鬼の首を取ったとばかりに担いでその道を戻った日、私も若くて力もあったと塾思う。最近想い出に浸りながら歩いたが見る影もない。かぐや姫が老婆になって現われたとしても絵にならない様な荒れようだ。

夢や物語りを感じさせてくれる野山が次々に変わっていく。大分前、市海道の通りがまだ開けていない頃、茶黒の犬を五〇六匹見た。人の邪魔もせず自分達の席でゆうゆうと生きていた。何を食べているのか・・・とは思いつつも山には結構何かあるのだろうと、我関せずの調子だった。その中に森林がなくなり家が建ち、施設や工場が出来ると犬達の姿はなくなった。新しい生活の範囲を求めて何処かへ行ったのか、その後、話しも聞かなくなった。暫くして霞ヶ浦に近い台の農村地域に白い犬が五〇六匹姿を表わすようになった。前の犬の代替わりか？ 前の群れとは違って吠え捲り追いかけてくる。あまりよい気分ではない。森を中心に移動し民家にも近づいて居座っていたり、

餌を欲しがる。自由があつて走り廻つてそういう面では幸せだろうが、食べ物を求めることは大変だろう、お前はいいねと犬に話してみた。何と思つて聞いたことか。ある散歩の朝、頻りに鳴いていた犬達が山の奥に入つていった。最後の一匹が私の方を見ていたが、やがて木々の間に見えなくなった。その後姿を見ることはなかった。あの日の姿や吠えていた様子は、まるで別れの挨拶のように思える。どうしたろう。

ぺんぺん草が音をたてた。よくねろ、よくねろ”と唱っている。仏の座が伸びていた。座します花の愛らしさ、犬のふぐりは、負けずと青空の青を見上げている。小さなこれらの草々はずっと以前より、人間よりもずっと以前より、生命を燃やしてきただろうに。人間が“畑”とよび、“耕作”することで、大地の主役ではなくなり、雑草とよばれるようになった。そして人間は除草剤を播くようになった。微笑みかける幼な児のような小さな花々を退治する為に、もう忘れたのか原子爆弾や枯葉剤をまいて大量殺人したことは忘れたのか。今は一般の住民が除草剤や殺虫剤を播き始めた。回りまわつて自分の体に戻ってくる毒薬だというのに。恐れを知らないのだろう。

人に会うと天気の話から始まるといわれた。その日の行動に影響を受ける。仕事するにも都合、不都合が出てくるから当然かもしれない。大自然の営みから受けているのも考えず、ちっぽけ一人の戸号であーやこーやと愚痴っていますが、一寸耳を澄ましてみましょう。空も雲も風も、そして星も月も太陽も人間一人一人に語りかけてくれています。雨も雷も、自分をとりまく一つ一つが自分に話しかけています。大自然の語りかけ

てくれている言葉や思いを受け取る力を貯えましょう。そこには暖かい思いや優しい力が湧いてきますよ。物語りが生まれます。



『自粛』

小林幸枝

新型コロナウイルス感染拡大により、生活環境は激変しました。

4月16日に全国に拡大された緊急事態宣言は5月明けまで外出自粛日々が続くこととなりました。マスク不足を解消するために布マスクを自作する方も増えており、私もマスク作りをはじめました。またこれがきっかけとなり、裁縫の魅力にハマってしまいました。

今は、夏用マスクとミニトートバッグを作っています。

あと、置物や押し入れなどを断捨離し、かなりすっきりしてきましたが、まだまだ残りがありません。

これもこの梅雨入り前に終了を目指します。

そして、早く気分もスッキリしたいと思います。この長く続いた外出自粛期間の影響で、私の体はコロナ太りしてしまったようです。

今後まだ、第2波、第3波がやって来る可能性があると思いますので、皆さんもくれぐれも油断しないようにお気を付け下さいね。

〈父のこと 21〉

菊地孝夫

長い自粛の期間が解除された。私個人に関しては、さほどの影響はなかった。行く先々でマスク着用が求められ、その度に面倒だなと思ったくらいであった。

商店や仕事をしている人たち、或いは休校になっっている児童たちは大変な思いをしているだろうと思う。今回のコロナ騒動にあたっては、大半の人がどこに怒りの矛先を向けてよいかわからない被害をこうむったことだろう。感染者の数も減少傾向がみられるということらしい。

自粛によって外出する人が激減して、それが感染者の減少につながったという話ではあるけれど、生来疑り深い性格なので、これらにはいくつも疑問符がついて素直には喜べない。結果が判明するにはまだまだ長い時間がかかると思う。

この一連のコロナ騒動で、連日のニュース報道に多くの目が注がれた。外出時にマスクをしている人が圧倒的に多くなった。どの店舗へ入るにも、マスクは欠かせないものになり、入り口での手の消毒や、体温の測定も珍しくはなくなった。手作りの色とりどりのマスクが到る所の商店で売られ

るようにもなった。これまでマスクする習慣のなかった諸外国でもマスク姿が珍しくない光景となった。南米アマゾンの先住民までがマスク姿で狩りを行っているとう何とも不思議な光景が映し出された。

先月の半ばに、図書館に行くと、貸し出しの期限が二倍のひと月に変っていて、貸し出しの冊数も倍借りられるとのことだった。じゃあこの次にたくさん借りようと思って次に行くと、臨時休館となっていた。

その時に、借りののが、二一年間の休暇（15少年漂流記）だった。子供向けのものだったが、完訳で、子供の頃に読んだ時とはだいぶ印象が違っていた。

もう一冊は、カミユの「ペスト」だった。フランス植民地下のアルジェリアでのレジスタンス運動と、その動乱期にネズミの媒介によって発生した疫病が物語の下敷きとなっている。カミユ特有の暗い文章は最後に一抹の光明を描いて終わっている。このところのコロナの被害も、光明が見えてくるというのになと思う。

スポーツの世界では、十両の相撲取りがコロナで亡くなったというニュースが流れ、次の興行開催が危ぶまれている。それでもまだ、スポーツ関連のニュースでは相変わらず、オリンピックがどうしたとかと言っている。

選抜に続き、夏の甲子園は中止が決定した。高校球児たちが悔し涙にくれる姿が連日報道されている。一方、プロ野球はオールスターを取りやめるなどの規模縮小で何とか開催しようと計ってい

る。お隣の韓国では、女子ゴルフツアーが解禁となったという。日本のゴルフ界でもせっかく昨年盛り上がった女子ゴルフブームを逃す手はないと、自粛解禁を待ちわびていることだろう。スポーツ界もエンタメ界も今回のコロナ騒ぎで大打撃を受けた。一日も早い解禁を望むのは当然だけれど、状況は少しも甘くはない。明確な見通しは誰にもつけられず、只々感染者数の減少傾向というあいまいな基準にすぎているだけとも思える。

〔特別定額給付金〕

北海道のある町では、一〇万円法案成立前日に、銀行口座にお金が振り込まれたそう。熊本県の町では、初日から動けるよう、職員を動員して準備しているという。

筆者は、5月14日に市役所本庁舎に行つて、定額給付金の早期申請の為の用紙を受け取つた。石岡市のホームページで、早期対応で、生活困窮者には、窓口や或いはネット上で申請用紙の交付が可能という事だった。さっそく必要事項を書き込み、身分証明のコピーと、銀行口座のコピーを添付し、捺印して郵送した。窓口での説明では、21日から28日の間という事だったが、一週間ほどして振り込まれていた。

大都市圏では、膨大な事務量に職員が忙殺されている。1億人を超える一人一人に給付金がいきわたるのにはまだまだ時間がかりそうだ。郵便局の職員も、通知書の配布と、例のマスクの配布も重なり、大変な仕事量になっているという。

今、自粛に逆行する行動は袋叩きにあう。今回は、パチンコ店とそこに遊びに行く人々がやり玉にあがっている。この緊急事態のなかでみんなが自粛しているのに、あまりに不謹慎ではないか、という論旨だ。水商売関連も、自粛解除の対象とはなっていない。関係する人はいっぱいいるはずだが、政策を左右するほどの大きな力にはなっていない。自己責任で行動するのがさも悪いことのように、強調される。

私は、発言力の弱いものを叩くという、このような動きには、絶対にくみしたくない。もう一人の私が、またぞろ怪しい論調が大手を振って、独り歩きし始めたよ、と教えてくれている。

先の号に書いたけれど、今の事態は、歴史的にも世界規模の事象が広がっているわけで、この石岡市周辺の田舎にも、否応なく大きな変化のうねりが押し寄せている気がする。これとどう対応していくかで、未来が決まると言ってもよい。

ある意味では先年の、震災を上回る出来事が起きてしまった。これを奇貨として、新しい何かを産み出していくことが未来につながるはずだと思っている。

このところの騒ぎで、せっかくの桜の花も多くの人に見られることもなく、淋しく散ってしまった。早々と梅雨の季節となつて、今年も暑さと熱中症との闘いの季節となる。今年も例年のごとく最高気温の記録が更新されていく。マスクをしていると、息苦しい。

コロナの猛威はひとまず落ち着いたように見える。下落が続いていた株価も戻りつつあるように

見える。けれども、将来は「コロナ不況」と呼ばれることになるであろうこの世界的な不況は、さらにもう一段の底へ落ちこんでしまうと思う。経済には素人の考えるこんな見通しが、外れればいいとは思わない。非正規雇用者や、外国人労働者などの失業者が増え続けている。順調に増えてきた外国人観光客も1パーセントぐらいに激減してしまった。新たな需要はいまのところさして力強さは見られない。

風と共に 《理》

大輪啓展

(編集部よりお詫び)

前回、会報に掲載する予定の原稿から後半が抜けてしまいましたので改めてここに掲載いたします。

式 かげ②

何かが実際に起きているその時には、誰しも視点が狭くなり、本来見えるはずの事象も感じ取る事、理解する事が難しくなります。

過ぎてみればなんて事ない笑い話しも、その時にはどうしようもないような、悲観的な心持ちとなる事もしばしばあります。

そうならない為に必要な事は何なのか。

1人の力で解決出来ることは、どの程度あるのでしょうか。

結局、人間一人一人の力、存在は小さいものな

のだと事ある毎に痛感させられます。

そして、重要な事こそそれなのです。

その人それぞれに困難に感じる事には違いがありますが、起きてしまった事象に対しては、必ずそこに第三者が現れます。活路を見出せるのも必然的にそこからののです。

人との繋がりが希薄な世にあつて、それでも助けてくれる・力になってくれるのは、いつもどこかの第三者の存在です。

いつどこで誰が自分の味方になるのかは分かりませんが、常日頃から心通わせられる、そんな友人知人を一人でも多く大切にしていくなければなりません。

勿論自分に近い存在は、より良い関係を築くべきです。

些細な諍いで袂を分かつ事も少なくありませんが、修復する努力はし続ける必要があります。

風によって運ばれてきたそんな何かも、今日もどこかで誰かに降り注いでいる事でしょう。

その何かが自分にとってどのような作用をもたらしたのか、

良い事ならその理を紐解いて、継続して実施すべきです。

もしも、悪い事であるならば、その理を紐解いて、どうすべきが良策だったのかを学び、発生する事自体を事前に防ぐのが良いでしょう。

子供の頃には多くの人が感じ取る事の出来ない、様々な感謝。

大人になったからといって、素直に感じ取れる人ばかりではありませんが、

感謝の気持ちを持って、心にゆとりのある日々を過ごしていけるのは理想と思います。

1日1回は感謝の気持ちを持って言葉にしましょう、

ありがとうございます。

【風の談話室】

《読者投稿》

やんちゃ男(1) (40)

やんちゃ女



雨が多かった所為か？まるで雨後の筍状態！その筍を竹林脇で、お湯を沸かし糠で灰汁抜きし、友人たちに送る・・・アツという間に夕方になり、恒例の散歩・・・一日が早い。

・日々の散歩は常態化している、今日は家のすぐ裏の山道を歩き、アップダウンある結構きつい気持ちの良いコースを4キロ。翌日は、5キロのコースを(時間にして1時間半) 平な農道を歩いて、木々の美しさにコロナの事も忘れて。別の日羽鳥駅までバス通りを歩いて見た。距離は約7キロ(所要時間1時間20分) 休み無しだった。羽鳥駅の駅舎は、完成しているが駅前はまだ工事中だった。帰りはバスの予定でいたが、何と1時間以上待たなければならず、やむなくタクシーで帰ってきた。行きにバスに乗り帰りは歩きになればよかったな、後の祭りです。

・今日も飽きずに懲りずにてくてく歩く。スーパーに車を置いて高友橋から恋瀬川の上流に向かって、川沿いの一面菜の花の中を歩き丸山古墳へ、気持ちのよい歴史散策路でした。距離にして5キロ、帰りにスーパーで買い物をしての帰宅でした。

・子供の日。鯉のぼりがスイスイ風に舞っていました。先日に続き清々しい青空、毎日の日課になった散歩。毎日歩いていてもまだまだ知らない道がある。今日も新しい道を開拓した。あざみの花が咲いていたり山藤が咲いていたり筑波山がきれいに見えたり、毎日新しい発見・・・ちなみに今日の歩行距離6キロ。1時間20分でした。

・今日は久々に街まで、と言っても市内は静まり返っていた。マリアージュの恵莉子さんと食事しながらいろいろお話をした。彼女は歌の力で地元を元気にしようと頑張っているが、コロナによる自粛ですべての活動の場が無くなってしまった。それでも明るい未来を信じて、私たちのために歌を3曲披露してくれた。全部がオリジナル曲「春が来る」「いのちの歌」「祈り」・・・現在の不安な気持ちに光を指してもらった。歌の大好きな恵莉子さん、一日も早く思いきり歌が歌える日が来ますように・・・。

・夏を思わせるような暑さ。友人からお誘いがあり、木漏れ日の庭でコーヒータム。その前にお花のあふれるように咲いているお宅を訪問したり、久しぶりに竹の師匠の庭を散策したりと盛りだくさん。ゆっくりゆっくり歩き、道端の小さな花にも感謝しながらの散歩でした。

・不思議な形の花。オダマキとイカリソウ。オダマキは地味にうつむいて咲いていますが、顔を覗いてみると何とも可愛い。イカリソウは花火のようでこちらでも可愛い。雨に似合う花。生き生きとしています。華やかでエレガントなジャーマンアイリス。上に向かって真っ直ぐに伸びて咲くアヤメ、凜としています。レンゲツツジ、鮮やかな朱色と黄色の花。今年はとりわけ綺麗に咲きました。

・夕食は餃子です。夫は自分用のフライパンを買ってきました。果たして焼き具合はどうでしょうか。翌日は山菜づくしく山菜の女王と言われるこしあぶらを頂いた。天ぷらとゴマ和え、ちよっとほろ

苦く独特の香り。ワラビを頂き一晩アク抜きしたのを昼に油揚げと炒めた。

・我が集落では田植えはほぼ終わったようです。あちこち田植え機が行き交い賑やかな連休です。中には自動運転の田植え機もありました。夜になるとカエルさんの大合唱がハンパでは有りません。

・朝、空すーいよ、の 声に空を見上げると一面の何と表現していいかわからない空模様、地震雲みたいダナなどと思いながら家の中に入ると緊急地震速報が、最近地震が多いし何かと不安なり～

・家から離れた栗畑で作業をしていると、知らない人から声をかけられたりする。今日も知らない車が止まった。何かなと思って近づいて行くと道路に面した所に咲いているハナミズキの枝をもらえないかとの事。話を聞くと、ゴルフ場の玄関先に飾りたいのだと言う。どうもお花屋さんらしい。背丈位の枝2本頂きたいというので、夫がのこぎりでギョギョと切り分ける、花は丁度満開。お札にゆりの花など2束とパン、それに大切な枝を切ったのだからと気持ちですとお金を渡された。気持ちだけ頂きますとお金はお返しした。するとしばらくして八郷納豆を沢山買ってきてくれた。我が家のハナミズキ、皆さんに喜んで貰えるといいなあ。このハナミズキは、だいぶ前に楽市さんから頂いたもの、今は大きな木になりました・・・。

・家からちよっと離れた畑。通りに面しているの で時折声をかけられる。今日も知らない車が止まり、何かなと思って近づくと、道路に面して咲い

ているハナミズキ。その枝をもらえないかと・・・。話を聞いて見ると、ゴルフ場の玄関に飾りたいのだと言う。どうもお花屋さんらしい。背丈位の枝2本頂きたいというので夫がのこぎりでギョギョと・・・花はちよっと満開。枝のお札にゆりの花など2束、パンそれに大切な枝を切ったのだからと気持ちですとお金をわたされた。気持ちだけ頂きますとお金はお返しした。するとしばらくして八郷納豆を沢山買ってきてくれた。我が家のハナミズキ皆さんに喜んでいただけるといいなあ。このハナミズキもうだいぶ前に楽市さんから頂いたもの、今は大木です・・・。

・JA直営納豆工場の納豆は、地元産大豆に拘る。今年はこの納豆が大活躍した、コロナで外出自粛している東京の友人に送って大変喜ばれた。今日は息子の店に一箱送った。テイクアウトで何とかしのいでいる？馴染みの客にサービスしてあげてとメールすると、しおらしく、ありがとうと返事が来た。

・数年前、NTTが庭にある不要の電柱を撤去しに来た。電柱にフジ蔓が絡まり綺麗な花が咲いているので、抜かないで置いた。その後フジの花も咲かなくなり、庭を改造することにした。それには電柱を抜かなければならない。細めの柱なので何とかなると思い掘ってみると、1メートル掘っても、まだまだ、もう、やめよう・・・隣にSOSを求める。ダダダとローダーがきた・・・アツという間に柱を引き上げてくれた。なんと有難い事。柱は2メートルも埋まっていた、長さ7メートル60キロの重さだった。老体に鞭打ち、紫陽

花の株、ツツジの株、フジの株、どれも大株、それらを掘って土を平らにし、一息ついた時には体はヘロヘロ。体も改造しなければ！

コロナいまだ収束せず

燕石山人

〔収束と終息〕

この大規模感染が世界で収束するのは早くても2、3年にかかる。さらに、終息となると、もつと時間がかかると考えておくべきだ。収束と終息を取り違え、混同して使っている。したがって、来年のオリンピック開催などは不可能になることは自明なことである。ということになれば、オリンピック開催による経済効果などは、全く期待できない画餅となってしまう。

1年間先送りになったことで、施設の維持費その他もろもろで、数千億円の費用が掛かる。その費用をどこが負担するのか。結局は開催都市と開催国の負担となる。間違ってもIOCは負担しない。10月の時点で、中止が決定されるなんてことも言いだした。金にまみれたこの組織は、早々と逃げを打っている。

4月26日の時点で、全世界の感染者数は、300万人。致死率は、単純平均で6・6パーセント。この数字を低いと見るか高いと見るか、評価は分かれる。日本は公式発表では3・6パーセントだけれど、実際はその数倍はくだらないだろうというのが多くの専門家の見解である。

もちろんのこと、日々刻々、状況は変わっている。この会報が印刷される時点では大きく変わる可能性はある。WHOの様々な評価も、政治にも左右され、ゆれ動いている。それが良い方向へと向かっているなら、喜ばしいことだけれども。外出自粛が日本中に要請され、その効果がもうすぐわかるだろう。もしも感染の発生が抑えられることになれば、それは喜ばしいことには違いない。

世界中で、感染者が増え続けている。日々のニュースによってみんな一喜一憂している。アジア地域では、明らかに減少傾向がみられる。一方ブラジルでは、短期間に数十万人の感染者が発生している。ヨーロッパでも、一時減少傾向がみられたが、ここに至ってまた増加しているようだ。

肝心の治療薬はもとより、有効な治療薬の大量生産もまだ軌道には乗っていない。ほとんどの人に行き渡るのはまだ長かかるだろう。この新型のウイルスの正体もまだ詳しくは判っていない。判明してからまだ半年足らず。製薬メーカーや化学メーカーはこぞって新薬の開発に邁進しているだろうし、研究機関も官民を問わず動いているだろう。

それらの成果が速く表れることを祈るしかない。とりあえずできるのは、ステイホームだけれども、自粛の早期解除で2次感染が起りうることを予想されている。いずれにしても簡単には収まってくれそうにない。

〔マスク地層考古学〕

あと数万年後の未来の地層からは、夥しい量の

マスクが発掘されることになるだろう。

未来人たちは、考古学者を集め、

「これはいったい何だ」

と首をひねることだろう。

太古の記録を調べていくうちに、やがて先祖の人間たちが、疫病の予防に顔面の半分を覆う布製の仮面をつけていたことがわかってくる。それを知った人たちは、腹を抱えて大笑いするだろう。

復元模型は滑稽きわまるものになる。疫病の予防にはほとんど役立たなかつたという事実もわかっている。そしてその仮面の名前がアベノマスクというものであることを知る。アマビエというへんてこな妖怪を疫病退散のおまじないとしていたことも判明する。21世紀の日本人はこんな非科学的だったのかと嗤然とするだろう。

5月25日の時点で、茨城県の新型コロナウイルスの感染者数は185人となっている。僅かに岩手県だけが一人も出さず頑張っている。

人口密集地や観光地が多くの感染者を出している。医療機関・老人ホームも、クラスターの発生源となっている。この手ごわい相手にまだ有効な手段がない。世界全体がこれに対して結束して当たらなければならない筈だが、各国の思惑が邪魔をして、なかなかまとまらない。

5月30日になつても我が家にはマスクが届かない。ネット上では、竹中平蔵元大臣が関与する企業が、このマスク関連で、実体のない企業を立ち上げ、数百億円の金が消えているという。これまた火事場泥棒に等しい恥ずべき所業だ。

日本では、感染者数は減少の気配を見せている。

ここで落ち着くか、再流行の前の一服状態か、専門家の間でも意見の分かれるところだろう。

ここへきてようやく、罹患率の調査が行われるようだ。日本での罹患率や死亡率が、世界の平均よりかなり低いのは、果たして本当に信じられる数値なのだろうか。今のところ死亡率は5%。少し前には2・3%だった。

我が人生は？

打田昇三

「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」という句もあるが人間は其の地位が上がれば上がるほど威張りがたがるものであろう。私が知る限りで地位が高くても其れを全く感じなかったお方は昭和二十年代・吉田内閣当時に衆議員議長をされた山崎猛先生である。選挙区は茨城県北で御自宅は常陸太田に在った。議長になられたときに、後援会長をしていた主人の使いで私はお祝の鯛を届け、お小遣いを頂戴した。衆議員議長から頂いた記念として持つて居れば良かったのだが給料が貰え無い小僧奉公時代なので使ってしまった。其処を数年で辞めたが、安定した就職も困難だった時代である。

私は東京タワー近くが本籍地で小学校三年生までは都内に居た。父親の家系は徳川幕府の通貨製造元である金座職人から身を起こして宮内庁御用達になった金属加工業であり、末子の父も独立して同じ仕事をして居た。少年時代には、天皇か皇族かの寝台が壊れたので修理の際に「弟子」の名目で皇居の奥へ入ったことがあると聞いた。

母親は警視庁警察官の娘だが生まれて直ぐに孤児となった。当時の伝染病で両親を同時に亡くしたのである。警視庁から養育料が支給され茨城で

叔父夫婦に育てられていたのだが、二十歳の時に警視庁に新設された悪名高き「特高警察」の課長官舎で働かされることとなり、その時代に父親の知り合いであった茨城県出身の警視庁警察官が同郷の誼で母親を紹介してくれたらしい。

私は長男であるが生まれたのは両親が結婚後十数年経ってからである。其の所為かどうか、あまり健康では無かった。昭和十五年、小学校三年生の時に父親が体調を崩し母親の出身地・茨城に来て病没したのだが、其れに続いて私も大病を罹患して長期欠席し、ようやく健康を回復したのは大日本低（帝）国が大国・米英などを相手に戦争を始めていた時代であるから、小学生でも近隣農家のお手伝いなどをさせられた。つまり学力は小学校中退程度しか無いのである。

大病で学校に行けず家が貧乏、と言う恵まれた環境からやがて敗戦、母親の知人を介して住み込みで働きに行った先が冒頭に述べた会社社長の自宅であつたから、金には不自由したが、食の不自由は無かった。しかし人間は他の動物と違い餌だけでは満足出来ない、其の後多種の労働を経て保安隊新隊員募集の試験を受けた。無学だが何とか勉強して合格、昭和二十七年十二月中旬に立川駐屯地の教育隊へ入隊したのである。

同期は四百名ほど居たと思うが所属部隊は兵器を扱う武器補給廠と其れに隷属する第七〇〇武器群（技術連隊）が主で、通信・衛生・輸送などの諸隊に配属された者も居た。配属先は示されたが半年間は新隊員基礎教育三ヵ月と後期専門教育三ヵ月を受ける。其の後、配属される部隊に依つて北海道など遠隔地を含む各地へ行くことになるのだが、武器群は霞ヶ浦駐屯地に新設される武器補

給廠に隷属するので移動予定先は土浦市である。

私は武器群の本部中隊所属を命じられ、前期基礎教育を受けたのだが、それが終わった時点で所属中隊長から呼び出しがあり「後期の教育は受け無くて良い」と言われた。クビになるのかと思ったのだが、連れて行かれたのは当時、副廠長兼務の群長（連隊長）室である。

当時の廠長（立川駐屯地司令）は通産省高官が出向で任命されていたが病氣療養中で、副廠長が代行されていた。中隊長が恐る恐る私を紹介して「当番兵として勤務させます」と言う。群長は、私の階級章を見て「二士（最下級の二等兵）か」とだけ言った。入隊したばかりなので二等兵しかないであろう：と思つたが文句は言えない。私が当番兵になった事を知つた中隊の物知り上官が「：お前は当番兵になつたらしいが、群長は久保栄の実弟だぞ！」と教えてくれた。

私は知らなかったが久保栄は北海道の財閥名家であり、久保栄は百科事典にも載っている劇作家・演出家で東京帝国大学独逸文学科卒、築地小劇場で小山内薫・土方与志の指導を受けてドイツ自然主義・表現主義演劇の翻訳・研究に従事し「新説国姓爺合戦」などの脚本を書いた。代表作「火山灰地」は第二次世界大戦前のリアリズム演劇最高傑作として絶賛された有名人だという。

其の実弟である群長は、北海道帝大出身のようで学徒動員の軍人経験も有ると聞いた。後に陸上自衛隊武器学校長（土浦駐屯地司令）、武器補給処長（霞ヶ浦駐屯地司令）を歴任される。

翌日から、私は起床時間前に起きて本部庁舎に行き群長室などの掃除・湯沸かしなどをして八時頃には専用ジープで到着される群長を玄関で歓迎

えする。お茶出し・食事準備のほか、隊内に電話も普及して居なかった当時は職務に関連して指揮下の幹部を呼び出す仕事も多く、其の方々が後に出世して部課長などになったから、私は階級が低くても上層部には名を知られていたのである。

昭和二十九年一月、武器補給廠は隸属する部隊と共に土浦市の旧・海軍航空廠跡地に移転する。高級官僚の廠長は乗用車での単独移動・別行動になるが、後に自衛隊体育学校長として東京オリンピックの支援団長をされる吉池将補（当時は総務課長）が同乗されていた。余談だが、吉池将補は都内の有名珈琲販売店の息子さんで軍歴があり

奥さんは大女優Tさんの女学校友達である。新宿歌舞伎町の豪邸に住んで居られ、新兵時代の私は御自宅で豪華な食事を御馳走になった事がある。話を戻すと、移動の当日、私は先頭の指揮官車（ジープ）後部座席で群長の荷物を抱えていた。立川から土浦までジープ・トラックなど百両近い車両が都内を通過するので警視庁は途中の信号機を全て青にしてくれたが、車両数の少ない当時だから出来たので、昼頃には牛久沼畔に到着した。其処で昼食休憩、立川を出る時に部隊の給食担当幹部から渡された弁当を群長にお出しする。

当時は牛久沼の辺りも交通量が少なく、百両以上が駐車していても通行に支障はなかった。其処で予想も出来ない民間トラックの交通事故が起き其れが私の目だったので、私は其の救出に当たり晴れの日に着て居た制服を汚す羽目になってしまった。駐車していたトラックで、運転手が車の下を点検中に、馬鹿な助手が操縦ギアを弄ったから車が動き頭をデフに挟まれたのである。

悲鳴を聞いた私は助手を怒鳴りつけて停車させト

ラックの下に潜って運転手を救出し、其れを警務隊がジープで病院へ運んだのである。不幸な運転手は辛うじて助かったらしいが、私は晴れの日の制服を汚してしまった。思い掛けない事件は有ったが部隊は無事に土浦への移動を完了。それ以来、秘書室勤務・対業者窓口・総務課勤務などを経て無事に定年を迎えた。引き続き農林水産省弘済会に再就職、六十六歳まで仕事が出来たのは幸運であり、以後は老人呆け生活を楽しんでいる。

茨城県の難読地名とその由来（3）

木村進

赤法花【あかぼつけ】守谷市、筑西市、五霞町

守谷市の地名説明には、平将門（10世紀前半）がこの地に城を築いたという伝説があり、それにまつわる伝説を数多く取り扱っています。その中の一つがこの「赤法花」です。

この将門の城といわれる場所は、守谷駅のすぐ東側の「ひがし野」地区にある通称「平台山」と呼ばれる丘の上です。ここに中世の土塁や堀の跡が残されており、「本守谷城址」または「守谷館跡」などと呼ばれています。この「赤法花（あかぼつけ）」という場所は、この城跡から少し東の小貝川に沿った地域につけられた地名で、守谷市のホームページの由来としては、「平将門が城内からあたりを見渡したところ、沼の向こう側にある壁が、唐土（もろこし・中国）の赤壁に似ていることから、「あかぼつけ」と呼ばれるようになった」とさ

れています。しかし、平将門がこの守谷（森屋）城を築いたという確証はなく、実際には将門の子孫を名乗る

「相馬氏」の城であったと考えられています。歴史を紐解いていくと、平安時代後期に実質的な千葉氏の祖といわれる「千葉常重」が上総氏（平常晴）からの相馬郡を譲られ、千葉氏を名乗りました。

そして、北相馬郡のあたりの土地一帯を伊勢神宮の領地として寄進し、「相馬御厨（そうまみくりや）」と呼ばれていた荘園（しょうえん）がありました。この後も源平の対立などもあり、この荘園の所領についてもめたようです。その後、鎌倉時代になり、源頼朝の有力なご家人であった千葉常胤の次男・千葉師常（もろつね）が相馬氏を名乗ったと言われています。そして、この守谷城を築いたとされています。この相馬氏は、自らを平将門の子孫であると述べており、この城も後世に「将門の城」といわれたことから、「相馬内裏」または「相馬偽宮」と大いに喧伝されました。「角川日本地名大辞典」でもこの伝承を載せているだけで、地名のその他の由来は書かれていません。では、将門伝説ではない地名の由来を見ていきましょう。

「赤法花」と今は漢字で書きますが、昭和21年の当用漢字が定められる前は「赤法華」と書かれていました。またこの「あかぼつけ」と呼ばれる地名は結構各地に存在します。

・福島県松枝岐村赤法華【あかぼつけ】、赤法華沢【あかぼつけざわ】（燧ヶ岳、松枝岐川＝実川の谷間）

・栃木県下都賀郡壬生（みぶ）町赤仏【あかぼつけ】（姿川の最上流部にある窪地）

・茨城県守谷市赤法花【あかぼつけ】（小貝川の右

岸段丘) (今回の地名対象)

・茨城県筑西市赤法花【あかぼつけ】(小貝川の左岸大沖積地)

・茨城県猿島郡五霞町小手指(こてさし) 赤法花【あかぼつけ】(利根川の右岸大沖積地)

などです。茨城県にも結構あります。一般にはこれらの地名の由来は古アイヌ語(縄文語)ではないかと言われています。「ボッケ」「ホッケ」「ポッケ」「ハケ」などが、*poke*であり、崖とか崖下を意味するといわれており、「アカ」については、「aka」で、魚の背の線を指す言葉で、地形に使われる時は「山の尾根(稜線)」を指すとされています。

「日本語になった縄文語(鈴木健著)によると、この「アカ」とつく地名は沖縄から北海道までたくさんあるとされ、沖縄の久米島に「阿嘉アカ」、慶良間(けらま)島にも「阿嘉・アカ」があり、土地の形状からしても「断崖」を意味すると考えられ、アイヌ語でも【*ak*】地形では尾根(山稜)を指す。北千島にもある語で崖または岬を指す。】とあり、絶壁の下に住む集落民からの発想で、*ak* われわれの *ak* 上方 というのが語源であろう となっています。

また赤薙山(あかなぎさん)・栃木県、赤城山(あかぎさん)・群馬県、赤倉山(栃木県)などの「赤」アカも崖地などを指している言葉ではないかとしています。ただ、今の地形から考えても崖地というには少し異なる場所も散見されるため、もっと別の意味があるのかもしれませんが、*ak* (わつか・水) から *ak* が抜けて *ak* アカとなったことも考えられ、水に関連した地名の可能性もあるようです。

その他

・宮城県栗原市石法花【いしばつけ】

・栃木県下都賀郡岩舟町法花【ほっけ】

・愛知県岡崎市法花【ほっけ】などという地名もあります。

なお、茨城県の石岡市鯨岡の小字名に「赤法ケ」という地名があります。地元の地名由来によると赤は土の色の赤茶色をした痩せた地土を意味し、「ボック・ホック」は茨城方言で、畑地の間に掘り下げた小さな水田をいう。と書かれています。

七五三場【しめば】 結城市

この七五三は人の名前(苗字)でも使われており、知っておられる方も多いかもしれません。「しちごさん」ではなく「しめ」と読みます。

しめ縄(注連縄)の「しめ」です。昔、しめ縄には三本、五本、七本というように紐をぶらさげたため、しめ縄のことを「七五三縄」とも書いていました。

この地が何故この名前になったのでしょうか。

「角川日本地名大辞典」によると、鎌倉時代ころに毛呂(もろ)郷の南域に「志目波(しめは)郷」という郷名があったといえます。

また、戦国末期の秀吉が山川晴重に与えた知行目録には「志めは」と見えると書かれています。このため七五三場村(しめばむら)という名前は江戸時代初め頃から使われたようです。

「志目波」が「七五三場」に変わったいきさつが書かれたものは見つかりませんが、縁起の良い名前にしようとして変えたものと推察されます。

また、この地名が直接神社(注連縄)に結びつく記録は見つかりません。

古渡【ふつと】

稲敷市

古渡は名古屋市にも同じ漢字の地名があります。が、こちらは一般には「ふるわたり」「こわたり」「こと」などと読まれ、古に外国から渡ってきた物などを指す言葉のようですが、ここ稲敷市の地名は「ふつと」と読みます。小野川が霞ヶ浦にそそぐ出口の場所につけられた地名です。

国道125号線で戸崎から浮島に渡るときに通る橋が「古渡橋(ふつとばし)」で橋の手前の旧江戸崎町側が「信太古渡(しだふつと)」、渡った先の旧桜川村側が「古渡(ふつと)」または「東条古渡(とうじょうふつと)」といえます。

1、「角川日本地名辞典」によれば、旧江戸崎町の古渡(ふつと)の説明として、古戸とも書き、小野川が江戸崎付近で広がり、狭水道となり当地に入る地形から女性器の古語であるホト(保戸・保渡)に由来するという説があると紹介されています。

また古渡村という地名は南北朝〜室町期に見える村名で、応安年間(1368〜1374年)頃と推定される海夫注文に「ふつとの津(古渡津、福戸津)」と見えるとあります。

また余談ですが、旧桜川村の古渡の説明には、新編常陸国誌に「東条古渡」とあり、南北朝には神宮寺城に拠って北畠親房を助けた近在の名主13名が処刑された(地元には十三塚の名前の謂われ

として残されている)が、不在で難を逃れた阿波崎村の名主六左衛門は帰宅後敵将を追い、小野川畔に自ら進んで殺されたと伝える。これを弔ったのが著名なホイホイ地蔵であると書かれています。

2、「古渡」(ふつと)のアイヌ語説…アイヌ語で「プット(pu tu)」に由来し、(川の)出口を指す言葉ではないかという説。

地形を見ると、小野川が霞ヶ浦に注いでいる場所です。流れの出口となっています。現在も、古渡の入り江は水路のように長く、景観がとても美しい場所、霞ヶ浦湖岸でも一二を争うくらい美しい場所で、茨城百景「古渡の湖畔」となっています。

3、昔、大和朝廷から派遣された武将たち(建借間命?)が、この地から潮来の方に渡り、賊(原住民)を殺したと伝わっており、それと同じく、この地でもこの地に住んでいた賊(原住民)たちの首を「フットフット」と刎ねたという言い伝えから名前が付けられたとする説。

この話は常陸国風土記に記載されている「潮来の名前の由来」にもある話に似ています。

鷺子【とりのこ】

常陸大宮市

茨城県の北西部、栃木県との県境に近い旧美和村の「道の駅みわ」に近いところに鷺子(とりのこ)という信号があり、近くには茨城県と栃木県にまたがるところに最近「ふくろう神社」として知られる「鷺子山上神社(とりのこさんじよう

じんじや)」という古い神社があります。

ここは茨城県と栃木県の2つの県にまたがる県境ですが、栃木県側の旧馬頭町(現那珂川町)とは、江戸時代は同じ水戸藩の領地で、当時は県境というような意識はなかったようです。

また、この鷺子山上神社(とりのこさんじようじんじや)ですが、89年に馬頭の僧で「大蔵坊宝珠上人」が四国の阿波国より製紙技術を得て、阿波忌部氏の祖神である「天日鷲命(あめのひめわしのみこと)」を祀った「鷲権現」という社を作ったことに始まるとされています。年代的には多くの神社が建てられた大同年間のことであり、どこまでが正確かはわかりません。

日本の神話を御存じの方はこの「天日鷲命(あめのひめわしのみこと)」がどういう神様かを御存じだと思えますが、天照大神が天岩戸(あまのいわと)の中に隠れてしまつて、この世が真っ暗になった時に、岩戸の前で楽器を演奏していたその弦に鷲(わし)が飛んできてとまったといひます。そして、この神は「天日鷲命」と呼ばれるようになります。

それが四国の阿波国を作ったとされる阿波忌部(いんべ)氏になります。

その阿波忌部氏が黒潮に乗って舟で北上して千葉県に上陸し、安房国が誕生し、また総の国ができました。そしてそこから北上し、この「天日鷲命(あめのひめわしのみこと)」を祭る神社が東国にたくさんできます。そしてその神社の多くが、「鷲神社」「大鷲神社」などと書いて「とりじんじや」「おとりじんじや」などと呼ばれています。ですから鷲(わし)を「とり」と読むのはあまり不思議ではありません。

地名としての「鷲子(とりのこ)」については、「角川日本地名辞典」によると、古くは鳥子と書き、元禄5年鷲子と改められた(永府志料)となつており、元禄郷帳では「鳥子村」とあり、天保郷帳では、古くは鳥子村とあるといひます。

県境の山「鷲子山(とりのこやま)」についても、奈良時代初期に書かれた「常陸国風土記」の那賀郡の条に「西は新治の郡と下野の国との境なる大さ山」とあり、当時はまだ名前がなかったと思われる(新編常陸国誌)とあります。

この地にある「道の駅みわ」の入り口に地元名産のキノコのオブジェと共に大きな石碑が置かれています。そしてそこには

「はとうからすやまとのこみち」(馬頭・鳥山・鷲子 道)と書かれています。

江戸時代はこのあたりは結構辺鄙なところで、道案内に上の様にひらがなで書かれていたのを、旅人は「鳩、カラス、山鳥の小路」と読んで、この道は人間が通るところではないと引き返したのだという笑話があるそうです。

またこの鷲子(とりのこ)地方は和紙の生産が盛んでした。

この鷲子(トリノコ)から美和を経由して常陸大宮を通つて常陸太田へ出る国道330号線は江戸時代には「紙街道」とも呼ばれた道でした。

それは、この鷲子地方から小瀬地方が良質の紙(和紙)の生産地として非常に栄えていたのです。和紙はまた久慈川をさかのぼった方でも盛んに紙漉き場があつたようです。

ところで、トリノコ紙(かみ)って聞いたことがありますか?

鳥の子紙は雁皮（ガンビ）、コウズ、三極（ミツマタ）などを原料にして作られた高質な和紙の呼び名で名前の由来としては、文安元年（1444年）成立の『下学集』では、「紙の色 鳥の卵の如し 故に鳥の子というなり」と説明しされており、また『撮壤集』には、「卵紙」と表記している。と書かれています。

一方トリノコ用紙とは「模造紙」のことという地方もあります。これは、愛媛県や香川県などで主にそう呼ばれているようです。またその他の地方でも模造紙といわずに、サイズから「B紙」、材料から「ガンビ」などと呼んでいる所もあります。ではこの模造紙ですが、これは和紙ではなく洋紙で、日本の「トリノコ和紙」を模造して造ったので模造紙といわれているのです。

紙の歴史をたどると、エジプトで発明されたパピルスがもともと古いとされていますが、現在のように植物繊維を水に溶いて漉く方式の紙は中国で約2000年前に発明されたものです。

日本に入ってきたのは西暦610年頃に高句麗の僧、曇徴によって製紙法が伝達され広まったと伝えられています。鷺子山上神社の創建が9世紀初めのころとすると、1400年前に伝わった紙漉き（かみすき）の技術が、四国阿波地方で広がり、それが1200年ほど前にこの地に伝わったということになります。そして、この地で製紙産業が盛んになり、紙を水戸や江戸に運ぶ道として現国道293号線は栄えました。

この鷺子の和紙は質が良く、明治の選挙の時の投票用紙にも選ばれました。

「和紙」と「鷺（わし）」なんていうのもダジャレではないが意味があるかもしれません。

鳥の子紙は上質の和紙の代名詞となり、その技術が高く評価され、日本政府が1891年のパリ万国博覧会のウィーン万博にこの手漉きの和紙を出品して日本の優れた技術が世界に知られるようになりました。

特に絵を描き、壁紙とするのにとっても良かったといえます。その日本の「鳥の子紙」を真似てオーストリアで模造紙が造られ、今では洋紙が主流になってしまったのです。

ここ鷺子山上神社のある地方が「トリノコ紙」の名前の由来になったとの確証はありませんが、逆にトリノコの名前が先にあって、この地に伝わって地名になったのかもしれない。

《風の会文庫のお知らせ》

ふるさと風の会では、会員の原稿を纏めて小冊子などで販売しています。ご興味があれば下記へ

ふるさと風 Shop :

<https://ishioka.buyshop.jp/>

・打田昇三の私本将門記「罪と名声」:

<https://ishioka.buyshop.jp/items/25101672>

・木村進「茨城の難読地名」:
<https://ishioka.buyshop.jp/items/15704954>

【特別企画】

打田昇三の将門記

「罪と名声」(五二)

○京中の騒動

原文の書き出しは「ひとえに此の言を聞きて」である。将門が田舎芝居の様に新政府を樹立した情報を聞いて…ということであろう。将門は京都を攻める！などと言っては居らず、本心としては

東国に理想的な国家を建てようとしたのかも知れない。後に戦国時代が到来するのであるから其れが悪とは言えないけれども、近隣諸国に赴任していた長官（国司）は腰を抜かす程に驚いた。魚類が物に反応し、鳥が音に怯えて飛び立つ様に任地の職務を放棄して都へと逃げ帰ってしまった。

武蔵や相模など国司が不在となった国には新皇（将門）が自ら巡検して国印や鍵を抑え、残された国府役人には「従来通り、公務を遂行する様に！」命じた上で、都には「平将門が新たに天皇の位に就く」ことを書状で申し送ったのである。

そうしておいて将門は下総国（本拠地）に帰った。是は中々に出来ない素晴らしいことではあるが、朝廷にとっては「青天の霹靂」に相当する前代未聞の大事件である。

政府要人は仰天し、宮中では大騒動になった。当時の天皇（第六十一代・朱雀天皇）は未成年であるから恐怖で右往左往するしか無い。取り敢えず仏様に頼って十日間だけ命が有る様に祈った。なぜ十日間なのか？算定根拠は分からないが其の間に名僧と言われた各寺の僧侶を呼び集め、十日以後の無事を願って次のような御祈禱をした。

「神仏に対して畏れ多いことですが私は幸運にも皇位に着きました。ところが、此の度、東国に於いて平将門が反逆し日本国主の地位を奪おうとしております。現在はまだ都には来ておりませんが、いずれは攻め寄せて来るものと思われまふ。どうか神仏に置かれては将門の邪心を留めていただき、此の都が平安であります様にお護り頂きたくお願いを申しあげます…」

その様に懇願すると、天皇は自分から玉座を降りて両手を額（ひたい）の上で合掌させ一心に祈

りを捧げた。それを見た取り巻きの連中も、其の俚と言う訳にいかないので、天皇の真似をして祈る振りをした。其れに加え（天皇の命令が有ったと思うが）宮中に仕える多くの者たちが、身を清め、威儀を正して一心に祈りを捧げた。そう言う状況であるから近辺の神社仏閣では、邪惡追放・惡鬼（此の場合は平将門）退散の法要や儀式が頻繁に行われていたのである。

「護摩を焚く」と言うが煙を出すためには芥子（けし）を用いたようで、それも何か所かであるから使用した量が一二六〇リットル余になったと言われる。其れだけの量が良く有ったものと感心する。更に燃やした薪やら、お供え物など種類も量も莫大な数字になった。反面で誰かが得をしたことになるけれども…

集まった人々は「惡鬼」として平将門の名を書き或いは紙の人形を平将門として呪いを込め其れを棘（とげ）の有る木に吊り下げた。其処までは人間がしたことだが、遂には仏像であるべき筈の「五大力菩薩」まで出てきて、鐺矢（音を出す矢）を賊（平将門）が居る関東に向けて射たのである。

そうした状況に天の神々は苦々しく思つて顔を顰（しか）め、行動した都の人々では無く遙か関東に居た平将門の野望を非難した。是に對して地の神も同調したから、京都市中に矢一本も射ていない平将門は遙かに離れた京都で反逆者・惡人とされてしまったのである。

○常陸掃討

人間生活では、冷静に見てみると錯覚とか思い違いとか、余期しない方向に運命が向いてしまう

ことが有る。平将門の場合も常陸国府まで出かけて合戦となり大勝利を収めてしまった。それ以後は言うなれば空回りの様な状態で名声が高まり京の都にまで恐れられる存在になったけれども最初に追つていた宿敵・平貞盛との決着は未だついていない。其れに気が付いたのかどうか、相模国から戻った平将門は天慶三年正月月中旬に、五千の軍勢を率いて常陸国へ向かったのである。将兵の疲労は回復して居らず、預貯金も残高は無かった。何よりも、合戦で一番に苦勞をする馬も、未だ充分に休息はとれていなかったのである。

現代にも通じることであるが、何事も程々が大事であり、将門記の作者も「…井の底の浅き励みを案じて、堺の外の広き謀（はかりごと）を存ぜず…」と非難している様に、相模出兵と皇位潜称で思ひ上がった平将門は殘敵掃討を口実として無謀な行動を始めたことになる。現在是将門の本拠地も茨城県になるが、当時は下総国であり常陸国は他国である。其の国府（石岡）を結果的に焼いてしまった平将門は、現地住民からは「鬼」として恐れられている。其処へ再び行くのであるからどう考えても歓迎はされない。

茨城県民として自慢する訳では無いが常陸国は上総・上野両国と共に「親王任国」国主を親王にする（収益は皇室經費にする）国」として指定された大国であるから狭くは無い。県央・県北は桓武平氏の内輪揉めに影響されず残つていた。

原本には「新皇に祀り上げられた平将門は“井の中の蛙”の浅はかな考えであつて、日本全土とか或いは海外にまでも目を向けるような大志は無かつた…」ように書いてあるが、古い時代のことであるから是は無理も無い。将門としては東国支

配が進んでいても、最大の目的である平貞盛と藤原為憲の追討が済んでいないことが最大の氣掛かりであり、最優先の課題なのである。

遠征に對して常陸国的那珂郡と久慈郡つまり北部に赴任していた藤原氏らの官僚たちが慌ててお迎えに出た。原本には堺（さかい）に迎えたと書いてある。国境では無く郡境であらう。出迎えただけで無く、官舎にお迎えして最大限の接待をしたのである。何しろ自分で天皇を称している偉い人であるから接待にも神経を使う。

しかし将門のほうは御馳走よりも「逃げた敵」のことが氣掛かりである。「常陸掾・平貞盛及び藤原為憲らの潜伏先を知っていれば申せ！」と天皇らしくない要求をした。「知っていれば…」と言う条件付きだが、厳しい顔で言われたので地元役人たちは大慌てで次の様にお答えした。

「私たちの知る限りでは逃亡者が此の地域に入り込んだという事実は有りません。しかし耳にした噂では、浮き雲が飛び来て飛び去るように何処かへ行ったということです。現在の所在地も逃亡先も全く存じません…」

貞盛を追い詰める将門の執念からすれば全く頼り無い返事であるが嘘では無いので、将門も信用する他は無い。原文は其処で切れているが何の收穫も無い俚で、将門軍は探索を続けながら茨城北部から戻つて来るのである。

○貞盛の妻への恩情

此の章段と対比される項目として「(その二)」で紹介した「葦津江の遭難」がある。合戦を避けて葦津江に潜んでいた将門の家族が、敵に発見さ

れて殺害されたり拉致されたりした事件である。今回は常陸国の北端まで探索したにも拘らず、十日を過ぎても敵兵一人すら発見できなかった将門軍が虚しく常陸国へ引き揚げることになった。

大雑把な言い方で申し訳ないが空振り凱旋をする将門軍は現在の水戸・茨城町近辺に当る常陸国吉田郡に差し掛かった。其処には現在でも釣りの名所で知られた涸沼が有る。当時は蒜間江（ひるまのえ）と呼ばれており、完全に海と繋がっていたらしい。追われる貞盛らは海外逃亡を企てた訳ではないと思うが其の近辺に潜んだのであろう。

涸沼近辺にも「平国香の墓」と言われる場所が有るらしいから、或いは平家領地が有ったのかも。葦津江の場合と逆になるが追われる貞盛も妻子を離して避難させていた。船では無くて信頼できる領民の家に匿われていたと思われる。然し、敵に逃げられた将門軍は暇であるから徹底的に搜索をしたらしく、平貞盛の妻と源扶（貞盛の義兄弟）の妻らが捕らわれてしまった。此の場合、一応は「妻」と書いたが、其れが第一夫人か第二、第三夫人かは不明である。捕らえたのは、将門軍の先陣を務める多治経明と坂上遂高（さかのうえのかつたか）らの軍兵である。

先陣であるから本隊に居る将門とは距離が離れている。将門の許に報告が届いたのは、かなり時間が経ってからである。将門は直ぐに「捕らえた女性たちに乱暴な振る舞いをしてはならない！」と命令をしたのだが、命令が伝わる頃には美人たちは丸裸にされ、屈辱の涙が化粧の黛などを溶かしており酷い顔で泣き伏すばかりになっていた。

無抵抗な女性たちには気の毒な結果であるが、（その二）で書いた「葦津江の遭難」で将門の妻

子が貞盛らの軍勢に殺害されている。その報いが女性たちの受難となった…と言えない事も無い。乱暴をしたのは前戦の兵士だが、さすがに武將たちは将門に対して次のような意見を奏上した。

「恐れながら申し上げます。貞盛の妻として捕らえた女性は気品が有って身分卑しからず、誠に平家身内の女人と推察できます。つきましては逆に直接的な関わりが無いように思われますので出来ますならば深き御恩にて御放免頂き、此の俣郷里に御返し下さるべきかと存じます…」

是に対して将門公も、天皇に相応しく厳かに次の様なお言葉を述べられた。

「…女性が戦場などで放浪している場合には本来の主の許に返すのが古来の決まり事である。又孤独な寡婦（やもめ）や身寄りの無い者に然るべき救いの手を差し伸べるは帝王の範とすべき行為である。（女性たちは国許に送らせよ）」

さらに将門公は捕虜の女性に一襲（ひとかさね）の衣服を与えた。そして相手の反応を見るように将門天皇の御製として、次の様な歌を贈った。

「よそにても風の便りに吾（われ）ぞ問ふ

枝離れたる花の宿りを」

そこで忠盛の妻も、当時の風習として返歌を送らねばならないから（それどころでは無いが…）

「よそにても花の匂いの散りければ

我が身侘し（わびし）と思ほ得ぬかな」

と詠んだ。一緒に捕らえられた源扶の妻も仕方なく自分の不幸を恥じて詠んだ。

「花散りし我が身もならず吹く風は

心もあわきものにざりける」

こうして歌を交わすうちに、お互いの心が和み将門の心に満ちていた悪逆の心も安らいでいった

…と原本に書いてあるが、嘘であろう。その程度で済むならば、最初から合戦などしない。

実はこの女性が争乱の原因になった…とする説もあるようで、原本には記載が無いのだが多分、平将門は此の女性（忠盛の妻）らを敵方に送り返したのだと思う。原本も中途半端になっている。此の次からは平将門を討ったとされる藤原秀郷が登場する。此の人物は氏祖・藤原鎌足から七代目と言うが、此の事件が無ければ世に出なかったのである。下野国の「押領司（おうりょうし）」Ⅱ武芸に長じた国史・郡司であつたらしい。それならば早い段階で将門と対峙する機会は有った筈だが…様子を見ていたのであろう。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>